

プラナカン性とリージョナリズム

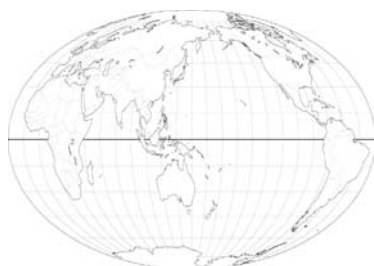
——マレーシア・サバ州の事例から

はじめに

リージョナリズムに関する議論は多岐にわたるが、一家の枠を超えたリージョナリズムであれ国内の一地方のリージョナリズムであれ、想定される「リージョン」の枠組みでのアイデンティティのあり方と既存国家の枠組みでのアイデンティティのあり方がしばしば問題とされる。ここでは原初的な感情に基づく紐帯が重視され、そのような紐帯に基づく範囲での自治を実現するか、あるいは関係する人々の間でそのような紐帯を醸成するかのいずれかを

リージョナリズムの目標とする傾向があるように見受けられる。これに対し、リージョンのアイデンティティやリージョンどうしの関係を原初的な紐帯と切り離して考えることの意味を検討し、これを通じてリージョナリズムの持つ可能性の幅を広げる議論を提供することが本稿の目的である。

本稿で扱うマレーシアは、地球上のほとんどの地域が国民国家によって覆われていく過程においてかなり遅い時期である一九六三年に国民国家として成立した。そのためマレーシアは、国際社会における規範である国民国家の理念を十分に意識しつつも、地元社会の事情に応じて国民国家を「改造」して受け入れた経験を持っている。地域と民族



山本博之

の関係に折り合いをつけようとしてきたマレーシアの経験は、今日のリージョナリズムについて考える上でひとつの参考になるはずである。

今日のマレーシアは、マラヤ、サバ、サラワクの三つの領域からなる。^{*1}この三つの領域はそれぞれ異なる領域国家化の経験を持ち、一九六三年にこれらの諸地域の連邦としてマレーシアが結成された後も各領域が高度の自治を維持して今日にいたっており、マレーシア国民としてのアイデンティティは今日なお形成途上にあるといえる。少なくとも一九九一年まで三邦は相互に内政不干渉の態度を維持しており、その点を強調すれば、国家どうしのリージョナリズムがアイデンティティを創出する過程として、マレーシア国民アイデンティティの形成を捉えることも可能かもしれない。他方、マレーシアをひとつの国家と見れば、サバやサラワクの立場は国内の地方によるリージョナリズムとしても理解できる。

以下、本稿では、まずマレーシアの連邦制を概観してマレーシアにおけるバンサ概念を整理し、そのうえでサバに焦点を当ててマレーシア形成の経緯を検討する。その際に、プラナカン性という概念を導入することにより、集合アイデンティティの拡大において非主流派が果たす積極的な役割についても検討したい。

I マレーシアの連邦制と民族

1 資格としての民族

連邦国家マレーシアは、一九五七年にイギリスから独立したマラヤ連邦が、近隣のイギリス領植民地であるサバ、サラワク、シンガポールと合同することで一九六三年に成立した。一九六五年にシンガポールが連邦を離脱したため、現在のマレーシアはマラヤ、サバ、サラワクの三つの領域から構成されている。

マラヤの政治指導者は、建国の最初の段階から多民族国家の運営を余儀なくされた。植民地時代にスズ鉱山やゴム農園の開発により国外から労働者が流入し、移民人口がマラヤの総人口のほぼ半数を占めるにいたった。移民系住民は出身国の出身地方ごとのまとまりで暮らしていたが、植民地の諸制度を通じて、マレー世界外部の出身者はそれぞれ華人とインド人というカテゴリーに分類され、マレー世界出身者はマラヤの在地住民であるマレー人²に含められ、この三つがマラヤの住民の三大カテゴリーとされた。この三つのカテゴリーの枠を越えた社会生活上の接触はきわめて限定的であり、通婚もほとんど起こらなかった。これら

の三つのカテゴリーは民族や種を意味する「バンサ」と呼ばれ、それぞれのバンサ内部の文化的多様性にもかかわらず、文化的共通性を持つ人々の括りであるとの認識が育つことになった。

マラヤが独立準備を進めた一九四〇年代から五〇年代にかけての時期は、「一民族一国家」を原則とするナシヨナリズムに基づく新興国の独立が続いた時期だった。マラヤの隣国インドネシアに典型的に見られるように、植民地に住む多様な住民が運命共同体であることを自覚し、自らをバンサと名乗って独立を達成した。このように、バンサの枠組みと国家の枠組みが幸運にも一致すれば、バンサは国民としての地位を得ることになる。バンサが自前の国家を持つという考え方はマラヤにも受け入れられたが、すでに三つのバンサが形づくられていたマラヤでは、いかにして「一バンサ一国家」の形を整えて独立を獲得するかが課題となった。

独立準備期のマラヤでは、三つのバンサの区別を取り払ってひとつのバンサを創出すべきとする立場と、バンサごとに文化的、社会経済的な違いが大きいためにバンサごとの自律性を維持すべきとする立場がそれぞれ存在した。両者の折り合いをつける形で生まれたのが、三つのバンサを認め、それらの連合体としてマラヤを運営するあり方だった。独立直前の一九五五年に実施された連邦参事会

の総選挙では、マレー人政党の統一マレー人国民機構（UMNO）、華人政党のマラヤ華人協会（MCA）、インド人政党のマラヤ・インド人会議（MIC）の三党によるマラヤ連盟が五二議席中五一議席を獲得して圧勝した。これによって三つのバンサから構成される統治制度が形成され、今日にいたるマラヤ（マレーシア）の政治制度の原型が形作られた*₂。

マラヤでは、各バンサが特定の地域に集住しているわけではなく、バンサに対して領域自治を認めるという形をとっていないという点では一般的な意味での連邦制とはいえない。しかしバンサの枠組みによる相互扶助と内政干渉に基づく統治制度が行われていることから、この制度を「バンサの連邦制」とする捉え方もある。

マラヤにはオラン・アスリ（原生人）と総称される先住民や、タイ系住民、ポルトガル系住民など文化的に他と明確に区別される集団があるが、これらの集団は単独でバンサとは呼ばれず、三つのバンサのいずれかに分類される。

このことからわかるように、バンサは文化を共有する集団として見られているものの、バンサを単なる文化集団として捉えることは適切ではない。バンサは、文化を共有しているという前提のもと、社会生活上の相互扶助を行う枠組みであり、また全国レベルの意思決定に参加する資格があると社会的に承認された枠組みとして機能しており、「資

格としての民族」と捉えることができる。^{*4}

このように、多様な背景を持つ人々が「区切った上で繋がる」という方法により、マラヤ（マレーシア）はこれまで深刻な民族間対立をほとんど招かず、比較的安定し調和的な国家運営を行って現在にいたっている。マラヤの「バンサの連邦」は領域自治を伴わないため、領域の区切り方によって文化的少数者が入れ子状に生まれてしまう問題は回避されている。また、バンサ間の勢力関係を数値によって定める方法をとらないため、実情に即した柔軟な対応が可能になっている。^{*5}

2 サバにおける民族と地域

一九六三年にサバとサラワクがマラヤ連邦と合同してマレーシアが形成された際に、マラヤの「バンサの連邦」をサバとサラワクにも適用することが検討された。しかし、両州の民族構成が複雑だったために「原住民はマレー人ムスリム、移民系住民は華人とインド人」という図式では把握できず、以下にサバの例で見えるようにこの制度のサバとサラワクへの適用は断念された。

まず、サバでは華人と原住民の混血者が多く、両者を厳密に分けることはできなかった。また、仮に何らかの標識によって原住民と移民系住民に分けることができたとし

ても、原住民のほぼ半数は非ムスリムだった。マラヤのマレー人の認識では、非ムスリムの原住民はいずれイスラム化によって「文明化」されることで「マレー人になる」人々だったが、サバの非ムスリム原住民（先住北ボルネオ諸族）の一部は本稿で述べるように一九六〇年頃までにカダザン人アイデンティティを唱えるにいたっており、マレー人の一員とされることを強く警戒していた。

非ムスリム原住民を「バンサの連邦」に適切に位置づけることができず、マラヤの政治指導者たちはサバの住民をバンサ別にマラヤの相互扶助の枠組みに接合することをあきらめた。サバには領域に基づく自治が認められ、サバの住民の相互扶助にマラヤは責任を負わないこととなった。

サバは州議会を持ち、サバ州民を有権者とする州議会選挙によって州議會議員が選ばれ、州議会で多数の議席を占めた政党から州首相が選出されることとされた。州の管轄事項は日常的な行政を含めて多岐にわたった。たとえば、サバ州は出入境管理の権限を持ち、マレーシア国内の他州の出身者がサバに入境する際には入境審査が行われ、就労するには就労許可の取得が義務づけられた。連邦の国語はマレー語であるが、サバでは議会や裁判所など公の場所での英語の使用が認められ、この規定はマレーシア結成から一〇年が経過した後には州議会での議決によってのみ改廃されることとされた。また、連邦の宗教はイスラム教である

が、少なくともマレーシア結成から一〇年間はこの規定をサバには適用しないことが合意された。これらの規定は連邦憲法と州憲法に書き込まれ、サバの自治が制度的に保障された*。

これらの規定により、マレー人ムスリムを優位とするマラヤの性格を受け継いだマレーシアにあつて、サバでは非ムスリムや非マレー人の政治的な地位が相対的に高い状況がもたらされ、現在にいたっている。一九六三年のマレーシア成立に際しては、カダザン人政党である統一全国カダザン人機構（UNKO）の総裁ドナルド・ステファーンが州首相に就任した。マレーシア結成から一〇年経つた一九七三年には、ムスリム原住民政党である統一サバ国民機構（USNO）の総裁であるムスタファ・ハルン州首相のもと、マレー語を国語とし、イスラム教を州の宗教とすることが州議会で議決され、サバでもマレー人ムスリムの優位が強められたものの、これによっても非マレー人ムスリムの政治的プレゼンスが完全に失われることはなかった。一九八五年にはカダザン人キリスト教徒のバイリン・キティガンを総裁とするサバ団結党（PBS）が結成され、連邦の与党連合である国民戦線（BN）の支持を受けた州与党ブルジャヤ党（BERSAMA）を州総選挙で破り、バイリンが州首相に就任した。この結果としてサバで連邦政府と州政府と与野党のねじれ現象が生じると、一九九一年には

国民戦線の介入によってサバに国民戦線の構成政党の支部が結成され、サバの民族別政党と連合してサバ国民戦線が結成された。一九九四年の州総選挙でサバ国民戦線が州政権を奪取すると、サバ国民戦線政権はムスリム原住民、カダザン人、華人による州首相輪番制を導入した。この制度は二〇〇三年まで継続され、その間にカダザン人や華人が州首相となる機会を得た。このように、マレー人ムスリムが優位であるマレーシアにおいて非ムスリムが多数を占めるカダザン人は、バンサとして「バンサの連邦」に加わっていないにもかかわらず、集合的に見たときに、サバ州の枠組みを通して相対的に高い度合いの政治参加を維持してきたといつてよい。

以下では、サバをめぐる多様な「リージョンリズム」の動きに関し、地方財政、地方政党・議会、教育・文化の自治などの制度面での展開に関する議論からいったん離れ、二〇世紀半ばのサバで活躍したユーラシア人（欧亜混血者）であるドナルド・ステファンに焦点を当てることで、サバの非ムスリム原住民のあいだでカダザン人意識が形成された過程を跡付けるとともに、マレー世界において「ブラナカン」と呼ばれる混血者がマレーシア建国に果たした役割を検討したい。このことが、一見迂遠な方法にも思われるが、自らがおかれた「世界」の様子を観察し、そのなかで自分たちの生き方を提案する営みという意味での広義

の「リージョナリズム」に人々が込めた意味を見出すことにつながると思うためである。

Ⅱ マレー世界のプラナカン

1 マレー人概念とプラナカン

マレー・インドネシア語^{*8}では、域外からの外来者（主に男性）と在地住民（主に女性）との間に生まれた子孫のことを一般にプラナカン（*Peranakan*）と呼ぶ^{*9}。プラナカンは、一部で外来の生活様式を維持しながらも、在地の生活様式も身につけている人々としてイメージされる。

プラナカンとは、マレー・インドネシア語で「子」を意味するアナック（*anak*）から派生した語で、「〈外来者の〉〈現地生まれの〉子」という意味を持つ。日本語では、「〈外来者の〉と〈現地生まれの〉のどちらに力点を置くかによって「混血」または「現地生まれ」と訳される。この「混血」と「現地生まれ」の間には、次に見るような一種の緊張関係が存在する。

外部世界との関係が利用しやすいプラナカンには社会経済的な地位が相対的に高いものが少なくなく、しばしば在地住民による批判や羨望の対象となる。そのため、外来者

でありその土地に暮らす正統性に欠けるという意味を込めて、在地住民が「プラナカン＝混血」と呼ぶことがある。それに対してプラナカン自身が「プラナカン＝現地生まれ」を名乗るとき、血統にかかわらず自らが生まれ育った土地で暮らす正当な権利があるという意味が込められる。このとき、在地の既存のコミュニティに自らを位置づけることができないプラナカンは、自分たちの特徴を示す一般的な名詞や領域名などを用いて名乗ることがある。ここに、既存のコミュニティの枠組みを超えて、多様な人々を包摂する新しいアイデンティティを生み出す契機を見出すことができる。

プラナカンの大きな特徴のひとつは、それがマレー世界という特定の場において、主流派であるマレー人概念との関係において成り立っているところにある。マレー人概念は領域によって規定されるカテゴリーではないため、伸縮自在で融通無碍であるという特徴を持つ。一五世紀以降のマラッカ王国の勢力拡大により、マレー語とイスラム教が島嶼部東南アジアに広がり、多くの在地住民がマレー語とイスラム教を受け入れた。その結果、狭義にはマラッカ王国の統治者の家系がマレー人と呼ばれたが、マレー語とイスラム教を受け入れた在地住民をマレー人と呼ぶようになった^{*10}。

植民地化と国民国家化の過程でこの地域はマレーシアや

インドネシアなどの領域国家に分割された。ジャワ人やプギス人や狭義のマレー人などを含む国内の在地住民は、マレーシアではバンサ・ムラユ（マレーのバンサ）と総称されたのに対し、インドネシアではバンサ・インドネシア（インドネシアのバンサ）と呼ばれ、そのためインドネシアではマレー人といえばバンサ・インドネシアを構成する民族のひとつを指すことになった。

マレーシア地域では、ときには「マレー人は混血社会である」といい、アラブ系やインド系などこの地域を訪れる外来者を通婚などを通じてコミュニティに取り込み、コミュニティを拡張させてきた。しかし、コミュニティのなかで外来者のプレゼンスが大きくなると、「マレー人の純血性」を強調し、「混血者はマレー人ではない」といつて外来者＝混血者を排斥しようとしてきた。マレー人概念が拡張・収縮自在である様子を潮の満ち引きに喩えるならば、引き潮の後に浜辺に残るのがプラナカンであるといえるだろう。マレー世界では、マレー人概念の拡張と収縮の繰り返しに伴って、必然的に境界部に外来者＝混血者であるプラナカンを生み出してきたのである。

2 ジャワイ・プラナカン

在地の既存の集合アイデンティティを用いるかぎり主流

派に位置づけられないプラナカンからは、社会の十全な成員として位置づけられることを求めて、マレー人と自身をともに含む包括的な集合アイデンティティを唱えるものが現れることがある。そのような例のひとつにジャワイ・プラナカンがある。

「ジャワイ」とは、かつて中東で東南アジア由来の人や言葉^{*11}を指した言葉だった。イスラム教の到来とともにこの言葉も東南アジアに持ち込まれ、はじめのうち東南アジアでは「ジャワイ」は「ムスリム」（したがって外来者）という含意を持つことになった。後に東南アジアで在地のムスリム住民が増えると、彼らはインド系の外来ムスリムやその子孫に対し、町に住んでいて自分たちと異なるという意味を込めて「ジャワイ・プカン」（町のジャワイ）と呼んだ。ここでジャワイとはムスリムを意味しているが、在地ムスリムはマレー人を名乗っているため、ジャワイと呼ばれるのはマレー人でないムスリムということになる。これに対し、ジャワイ・プカンと呼ばれた人々のなかから、後に「ジャワイ・プラナカン」を名乗り、同名の雑誌を創刊する人々が現れた。^{*12}ムスリムを在地ムスリム（マレー人）と外来ムスリムに分ける見方に対し、自分たちはみな等しくジャワイ・プラナカン（現地生まれのムスリム）であると呼びかけたのである。

マレー人と非マレー人の区別なくムスリムをすべてジャ

ウィと呼ぼうとするこの試みは多くのマレー人に受け入れられずに定着しなかったが、マレー世界の非主流派が主流派と自分たちをともに含む形で新しい集合アイデンティティを唱える試みはその後も繰り返し見ることができ^{*13}る。マレーシア建国の過程で重要な役割を担ったドナルド・ステファンも、そのようなプラナカンの一人だった。

Ⅲ ドナルド・ステファンとカダザン人

1 サバの民族状況

西洋人の到来以前、ボルネオ島北西部はブルネイ王国とスルー王国による統治領域だった。住民は文化的に多様だったが、一九世紀末以降この地への統治を確立していったイギリス人により、沿岸部のムスリム原住民、内陸部の先住北ボルネオ諸族、そして都市部の華人と大きく三つに分けて認識されるようになった。

ムスリム原住民に関しては、植民地化の過程でサバという統治領域がブルネイ王国とスルー王国のいずれの王都からも切り離されて形成されたこともあり、ブルネイ王国やスルー王国の支配層であるブルネイ人やスルー人をはじめとする沿岸部のムスリム諸族はサバの本来の原住民ではな

いとする考え方があった。

先住北ボルネオ諸族は、伝統的な支配階層であったブルネイ人による名づけに倣ったイギリス人によってドゥスン人およびムルト人と呼ばれた。先住北ボルネオ諸族は互いに言語や慣習の上で共有点多かったが、ドゥスン人やムルト人と括られても互いに仲間意識を持つにはいたらず、ロトゥド人やティンダル人など地域ごとに固有の自称名を持っていた。それらのうち、西海岸のプナンパン郡出身の人々はカダザン人を自称していた。

プナンパン郡の一九五〇年ごろの人口は約一万三〇〇〇人で、その三分の二がドゥスン人（カダザン人）だった。華人との通婚も多く、その子はシノ・カダザン人と呼ばれ、父母のどちらがカダザン人であるかを問わず、本人がカダザン人コミュニティでカダザン人として暮らすかぎり^{*}は法的にも慣習上もカダザン人扱いを受けた。当時のプナンパン郡の原住民行政の長がタン・ピンヒンというシノ・カダザン人だったことは、シノ・カダザン人が原住民社会の一員として認知されていたことをよく物語っている。また、キリスト教の普及に伴って白人の生活様式を真似る人々が増え、一九五〇年ごろの調査報告ではプナンパンのカダザン人は「真のドゥスン人」であるより「偽白人」であることを好むと評されるほどだった。^{*14}

2 アナック・サバとしてのステファン

独立後のサバで初代州首相を務めたステファンは、白人の外貌を持ち、カダザン人指導者と見られているという、一見すると矛盾した姿を見せている。これまで長く「オーストラリア人の父親とカダザン人の母親」を持つと語られてきたが、一九九九年に姪による伝記が出版され、「オーストラリア人の父親とカダザン人の母親」とは実はステファンの父親のことであり（ただし正しくはオーストラリア人ではなくニュージールランド人）、ステファンの母親はイギリス人男性とサバ在住のアジア人女性（おそらく日本人女性）であったことが明らかにされた^{*15}。

ステファンの父ジュールズは、サバに赴任したニュージールランド人男性がカダザン人の「現地妻」との間にうけて棄てた子だった。ジュールズは、父親からも母親からも切り離されて全寮制のミッシヨン・スクールに入れられ、白人コミュニティにもカダザン人コミュニティにも位置づけられずに育てられた。ステファンの母エディスも同様の境遇にあり、イギリス人男性がサバで現地人女性との間にもうけた子で、ミッシヨン・スクールに入れられてジュールズと出会った。

白人コミュニティにも在地のコミュニティにも自らを位

置づけることができなかったジュールズは、自らを「アナック・サバ」（サバっ子）と位置づけ、子どもたちもそのように育てた。それを象徴するのがジュールズの最期である。ジュールズは、日本軍政期中の一九四三年一〇月に華人や原住民が起こした抗日蜂起に連座して処刑された。後に州首相となってこれらのサバの英雄たちを弔ったステファンは、「サバのために戦い、サバのために命を落とした」と評している。

日本軍政期後、ステファンは一九五三年にサバ初の英語日刊紙『サバ・タイムズ』の創刊に編集者として参加し、後に同紙の編集人兼発行人となった。執筆活動を通じて社会の諸問題に対する改善を訴えるようになると、植民地政府は一九五五年一月にステファンを立法参事会議員に任命した。ステファンは新聞と立法参事会の二つの場を利用してサバの独立のために数々の提言を行い、やがてサバの独立構想も語るようになっていった。

ステファンを助けてアナック・サバ概念を深める手助けをしたのは、もう一人のプラナカンであるK・バリだった。^{*16} K・バリは、サバにおいて形成されるべき共同社会をバンサ・サバと呼び、『サバ・タイムズ』のマレー語面の編集者となって紙面を通じてバンサ・サバの創出を訴え続けた。

これより前、サバではマレー語で「バンサ」といったと

き、日常的には動植物などの種類を指したり、人間集団としてはマレー人などの「高い文明を背負った人々」を指したりするのに使われていた。サバの多くのマレー語話者にとっては、自分の所属するバンサがあるかどうかは自分がマレー人になれるかどうかとほぼ同じ意味であり、マレー人になれないということは自ら積極的に名乗るバンサがないということの意味していた。これに對し、K・バリはサバをバンサと呼び、マレー人にならなくてもバンサになれるという考え方をもちこたした。^{*17}

IV マレーシア結成とカダザン人

1 プナンパン・カダザン人とステファン

プナンパン地方には早くからカトリックのミッションが入り、英語教育が行われ、イギリス人に慣れていたことから、プナンパンのカダザン人は植民地政府の下級官吏や民間企業の事務員として雇用され、サバ各地に派遣された。彼らは派遣先で同郷会のカダザン人協会を組織した。

政治的に目覚めたプナンパン・カダザン人は、ステファンと積極的に結びつこうとした。^{*18} もっぱら植民地下の新興エリートからなるプナンパン・カダザン人にとって、全国

の先住北ボルネオ諸族を統合して地位向上を図るには各地の伝統的支配層の動員が不可欠であり、そのための権威として目を付けられたのが立法参事会議員であるステファンだった。

これに對し、ステファンもプナンパン・カダザン人と結びつく積極的な理由があった。ステファンが立法参事会議員に選ばれた一九五五年、植民地政府は立法参事会議員を地元の各コミュニティから出された候補者から選ぶ制度を導入し、手始めに中華総商會が推薦した候補者から華人議員を任命していた。この方式に従えば、ステファンが立法参事会議員であり続けるためには何らかの地元コミュニティを代表しなければならなかった。このためステファンは、アナック・サバとしての意識を持ちながらも、カダザン人協会との結びつきを強め、カダザン人指導者としての立場を強めていった。

一九五七年三月、ステファンはプナンパンのカダザン人協会の総會に出席し、副総裁に選出された。ステファンはカダザン人なのかとの問いに對し、「ステファンはカダザン語を話すからカダザン人だ」という説明がなされた。その翌年、ステファンはカダザン人協会の総裁に選出された。

プナンパン・カダザン人は、一九六〇年には「原住民の日」をカダザン人の収穫祭にすることに成功した。^{*19} また、これと前後して、後述するように、『サバ・タイムズ』の

紙面を使って「カダザン人かドゥスン人か」とする論争が展開された。

さらに、ブナンバン・カダザン人はカダザン人の族長としてのフグアン・シオウ (Huguan Siou) という称号を創出し、ステファンをフグアン・シオウに即位させた。フグアン・シオウ即位にあたっては、ブナンバン近郊の村々をまわり、地元の伝統的支配層に村人たちの前でステファンに対する忠誠を誓わせ、さらにその様子を報道することでフグアン・シオウとしてのステファンの権威をサバ各地の先住北ボルネオ諸族に伝えていった。このときに重要な役割を担ったのが新聞とラジオ、すなわち『サバ・タイムズ』のカダザン語コーナーとラジオ・サバのカダザン語番組だった。^{*20}

2 「カダザン人かドゥスン人か」

ドゥスン人と呼ばれていた人々の一部がカダザン人を名乗るようになると、「カダザン人かドゥスン人か」が人々の話題に上るようになった。一九六〇年の収穫祭の前日、『サバ・タイムズ』にカダザン語と英語で「カダザン人かドゥスン人か」という論説が発表されたことにより、英語とカダザン語、そして後にマレー語を含む三つの紙面にまたがって論争が展開された。

論争の初期に、自分はシノ・カダザン人であり、人々から華人なのかドゥスン人なのか、それともシノ・ドゥスン人なのかとしばしば尋ねられるが、「自分はカダザン人だ」と宣言する投書が寄せられた。ここでシノ・カダザン人というのとは自分の客観的な属性を述べているのであり、それに対して「自分はカダザン人だ」といつているのは自分の意思の表明である。自分の存在に関して意思が表明されているもうひとつの箇所が署名部分であるが、そこにはプラナカンと書かれている。つまり、この投書子は、自らの意思としてカダザン人でもありプラナカンでもあるということになる。

これだけ見ると、混血あるいは現地生まれのカダザン人であると主張しているとも理解できなくはない。しかしカダザン人はもともと混血性で特徴づけられる人々であることを考えるならば、これは以下に見るようにマレー世界に自らを位置づけるといふ見方を反映させたものとも考えることもできるだろう。

別の投書子は、自分たちをカダザン人と呼ぶことに反対し、サバはマレー世界の一部なので自分たちはマレー民族と呼ばれるべきとの意見を披露した。非ムスリムがマレー人と名乗ることを心情的に受け入れるかどうかを措けば、この意見にも一理ある。サバの在地住民はマレー世界の一人であり、すでにマレー語を日常的に話している。した

がつて、彼らが自分たちをどう呼ぶかは、自分たちがイギリス人に倣うキリスト教とマレー人に倣うイスラム教のどちらの方向での文明化を求めるかという選択の問題であり、理論上はどちらの選択もありうるということを物語っている。

こうしてみると、カダザン人であることを選ぶことは、自分たちがマレー世界の一員であることを十分に自覚した上で、イスラム教ではなく外来の文明を背負う存在となることを選ぶということであるといえる。カダザン人とプラナカンが等式で結ばれる図式はそのことを象徴的に表しているといえるだろう。

3 カダザン人政党の結成

カダザン人の指導者となりながらもアナツク・サバの国づくりを目指したステファンの思惑は、当時の政治状況によって裏切られることになる。

一九六一年八月、カダザン人協会の全国規模の連絡組織が作られ、統一全国カダザン人機構（UNKO）と命名された。ステファンはUNKOをカダザン人協会の連絡機構として捉えており、政党はUNKOと別に結成するつもりだった。ステファンはアナツク・サバすなわちサバ国民を統合した政党である統一サバ国民機構（USNO）を設立

するつもりで、幼少のころから親交のあるムスリム指導者であるムスタファ・ハルンに働きかけていた。ムスタファもこれに前向きだったが、ムスタファのもとで政党結成に動いたムスリム指導者たちがステファンとの連携を嫌い、ステファンを排除する形でUSNOが結成された。このため、ステファンはUNKOを暫定的に政党として機能させ、USNOとの合同を求めたが、このことはカダザン人政党UNKOとムスリム原住民政党USNOの二つが作られたとしてサバの人々に理解されることになった。

なお、UNKO結成の過程ではカダザン人の混血性や多元性が再確認された。UNKO結成の前月、シノ・カダザン人はカダザン人ではないという一部の主張に対し、シノ・カダザン人の間でUNKOに加わらず独自の組織を結成しようとする動きが見られた。これに対し、シノ・カダザン人がいなくなればカダザン人は勢力が大きくそがれることになるとして、シノ・カダザン人のUNKO参加が求められた。

UNKO結成に参加した各地の先住北ボルネオ諸族の伝統的指導者たちは、ドゥスン人とムルト人がそれぞれカダザン人であるという決議を行い、UNKOの総裁にステファンを戴いた。ただし、カダザン人アイデンティティを受け入れたことによって、それ以前の集合アイデンティティが失われたわけではない。「カダザン人であることを

受け入れる」とは、ステファンを庇護者として受け入れること、すなわちステファンが自分たちの地位向上に責任を負うものであることを認め、そのかぎりにおいてステファンを自分たちの長として支持するということの意味^{*21}した。

4 マレーシア結成とサバ

一九六一年、マラヤ連邦のアブドゥル・ラーマン首相によりサバやサラワクをマラヤと統合するマレーシア構想が唱えられた。はじめアブドゥル・ラーマンは、マレーシア構想の根拠のひとつとしてボルネオ島のイバン語がマレー語の方言であると発言していた。ここには、ボルネオ島の多様な住民を（おそらくマレー語とイスラム教を用いた「文明化」を通じて）マレー人にするべき人々と捉えていたことがよく表れている。

ステファンやブナンバン・カダザン人指導者らは、はじめ「マレー人国家に呑み込まれる」とマレーシア構想に反対したが、マレーシア構想は原住民の生活水準の引き上げをもたらすものであるとのマラヤ指導者による説得と、州の枠組みで内政自治を得た上で連邦に加わるというアイデアにより、マレーシア結成を受け入れた。

イギリスはボルネオ諸邦に対する独立付与に関して「植

民地の住民の意向に従う」との態度をとったため、植民地住民の代表者がマラヤとの構想において重要な役割を担うことになった。それまでにサバで結成されていた五つの政党による意向を取りまとめたステファンのもとでマラヤと交渉が重ねられ、サバは「二〇項目の保障規程」により内政自治を獲得した上でマレーシアに参加することになった。五つの政党はマラヤによるサバの民族認識に対応してムスリム原住民政党、カダザン人政党、華人政党の三つに再編され、三党の連盟がサバ州政権を担うことになった。こうして一九六三年にサバはマレーシア結成を通じてイギリスから独立し、カダザン人政党の総裁であるステファンがサバの初代州首相に就任した。

おわりに

マレーシア建国の過程でサバをマレーシアの一員として統合し、また先住北ボルネオ諸族をカダザン人としてマレーシア結成に動員するにあたっては、サバとマラヤの社会的背景が大きく異なるとの理解に基づいてサバの州自治が認められ、これによってマレーシアの連邦化が実現した。この過程で、プラナカン性を備えたドナルド・ステファンはきわめて重要な役割を担った。

「マレー人であるかないか」が重要な意味を持つマレー世界にあつて、プナンパン・カダザン人ははじめイギリス帝国の威光を背負った文明化による地位向上を試みていた。しかし、K・バリによつてバンサに対する新しい捉え方がもたらされ、マレー世界にありながマレー人ではなくカダザン人を名乗ることができるようになった。このことがカダザン人のマレーシア参加を後押ししたひとつの要因となつた。マレーシア結成にあたってカダザン人政党がサバの他の民族政党との連盟結成に合意したことは、先住北ボルネオ諸族がカダザン人という枠組みを通じて（さらにサバという枠組みを通じて）マレーシアに参加することを受け入れたことを意味している。

ナシヨナリズム運動の初期にプラナカンが重要な役割を担う事例はマレー世界の他の地域でも見ることができ、他地域では独立達成時にプラナカンが重要な役割を担いえなかったのに対し、サバでは独立達成後もプラナカンがプラナカン性を前面に出したまま政治的に重要な役割を担つた。これは、マレーシアにおいてカダザン人がプラナカンの立場にあることをプナンパン・カダザン人が自覚していたことと無関係ではないであろう。ステファンやシノ・カダザン人を取り込む過程で自らの混血性を自覚したプナンパン・カダザン人は、マレー人が優位であるマレー世界において、マレー人になりうる存在であると同時にマ

レー世界の外部に由来する文明を担う存在でもあつた。彼らは、「マレー世界的な国家」であるマレーシアに参加するにあたり、イスラム教とマレー語で定義されるマレー人として参加することを拒否した。

当初イバン語をマレー語の方言といつていたアブドゥル・ラーマンをはじめとするマラヤの政治指導者たちは、ステファンらとの交渉を経て、マラヤのマレー人政党をサバに進出させることを断念した。このことは、サバやサラワクの原住民をマレー人概念に取り込むことに失敗したことを意味している。その結果として、マレー人がサバやサラワクの原住民を含めた形で自分たちを再定義したのが「マレーシア原住民」だつた。

ただし、これによつてカダザン人を含む先住北ボルネオ諸族がマレーシア原住民の十全な成員としての地位を得たわけではなかつた。マレーシアにおける政治経済文化の中心地域であるマラヤからサバとサラワクが切り離されて自治を享受したことは、マラヤのマレー人にマレー人としてマレーシアの主流派を構成するという認識を維持させるとともに、マラヤを中心に急速な発展を遂げるマレーシアのなかでサバが取り残される結果を生むこととなつた。そのため、先住北ボルネオ諸族のあいだで、自らの独自性を維持しつつ、マレーシア国民の十全な成員として認知されたいとの欲求が生まれることになる。一九八五年から

一九九四年までサバ州政権を担当したサバ団結党の目的はここにあったといえる。

サバ団結党はマラヤの連邦政府に対して対決姿勢をとったため、マラヤの主要政党は一九九一年にサバに進出し、サバの州政権を掌握した。このとき、サバに進出したUMNOは非ムスリムのカダザン人がUMNOに加入することを認めた。UMNOはサバの原住民を取り込むことに成功したが、その過程でマレー人のあり方に修正を余儀なくされたとも見ることができる。

サバとマラヤの交流は今後も増え続け、サバのマレーシアにおける重要性はますます高まっていくことだろう。それに伴って、サバ出身者がマレーシア国民意識を今以上に強めていくことも十分に考えられる。しかし、カダザン人やサバ人とはもともとマレーシアに自分たちを位置づけるために受け入れられた枠組みであったことを考えるならば、マレーシア国民意識の強化がただちにサバ人意識やカダザン人意識を薄める方向に働くとは考えにくく、むしろ互いに強化し合う方向に進むことも十分考えられる。

このようなアイデンティティのあり方に対し、利害に基づく結びつきによるものであるとして、原初的な感情に基づく紐帯よりも結びつきが強くないとする見方も存在する。しかし、マレーシアの経験は、地域社会がアイデンティティを維持した上で、より大きな枠組みでの協力関係を強

め、人々のあいだの一体感を育てる上で、原初的紐帯によらない多元的な関係性を積極的に認めることが有効であることを示唆している。

●注

*1 一九六三年のマレーシア結成時から一九六五年まではシンガポールもマレーシアの一部だった。また、現在のマレーシアにはいくつかの連邦直轄区がある。これらはいずれも本稿の議論と直接関係ないため、本稿では扱わない。

*2 マラヤ／マレーシアにおけるバンサ概念についてはAriffin (1993) を参照。

*3 本稿では、植民地化に伴う住民分類の導入によって移民系住民と区別されるようになった在地住民を「先住民」と呼び、先住性を根拠として移民系住民に対する優越した権利が法的に認められている（あるいは認められるべきと見られている）人々を「原住民」と呼ぶ。

*4 「資格としての民族」について、くわしくは山本（2006）を参照。

*5 もちろん、このことは、マラヤにおける「バンサの連邦」が問題をまったく持っていないことを意味しているわけではない。マラヤの政治的安定は、国家運営におけるマレー人の優位がマレーシア社会で（消極的であるにしても）広く受け入れられているために成り立っているのであり、この前提の見直しを求める声は（顕在化しないときも含めて）つねに存在している。これと別に、三つのバンサの境界が固定的に捉えられ、バンサ間の移籍が事実上不可能であることに起因す

る問題もある。これに関し、近年では、非マレー人のイスラム教への改宗やマレー人のイスラム教から他宗教への改宗の試みが家族の繋がりに影響を及ぼすという問題が目立っている。

*6 これらの規定で保障された州の権利がマレーシア結成後に部分的に縮小されている状況については山本(1996)を参照。

*7 州首相輪番制の導人については山本(1999)を参照。

*8 マレーシアとインドネシアの国語であるマレーシア語とインドネシア語は、もともと島嶼部東南アジアで広く用いられていたマレー語(ムラユ語)が植民地国家化と国民国家化の過程でそれぞれの領域で発展したものであり、語彙や慣用表現に違いはあるが、互いにかなりの部分で意思の疎通が可能な関係にある。本稿では両者をあわせてマレー・インドネシア語と呼ぶ。

*9 マラヤ／マレーシアのプラナカンについては Nagata (1979) を参照。なお、これまで東南アジア研究でプラナカンといえば現地化した華人系住民を指すことが多かったが、本稿では華人系住民に限らず、マレー世界の外部に血統上の故郷があると見られ、外来者かつ文化的混血者としての性格をもって現地化しており、そのように自覚していることが当人の思想や行動を形作る上で重要な役割を果たしている人々のことをプラナカンと捉える。

*10 地域によっては、非ムスリムの在地住民がイスラム教徒になることを「マレー人に入る」、ムスリムでなくなること「マレー人から出る」ということもあったという (Ariffin 1993)。

*11 ジャウイについては山本(2008)を参照。

*12 ジャウイ・プラナカン紙をはじめ、一九世紀から二〇世紀前半までの時期のマレー語出版については Roff (1967 [1991]) を参照。

*13 一九三〇年代にはマラヤ華人が「マラヤン人」を名乗り、マレー人を巻き込んだ論争に発展した。一九五〇年代には、アラブ系ムスリムのアフマド・ルトフィがマレー世界のムスリムをパンサ別にではなくムスリム同胞として捉えようとした。アフマド・ルトフィについては山本(2003)を参照。

*14 プナンパンに滞在して「ドゥスン人」の調査を行ったグリッジョーンズの報告書 (Glyn-Jones 1953) によろ。

*15 姪のグランビル・エッジによるステファンの伝記 (Granville-Edge 1999) を参照。

*16 K・バリはマラヤの克蘭タン生まれのホッケン・シャムで、インドネシア・ナシヨナリズムの理念に共鳴して民族や宗教の違いによらない社会を理想としていたが、日本軍政期後のマラヤでは華人とマレー人の対立感情が激しくなり、K・バリは意に反して華人扱いされることになった。このため、生まれ育った村を離れて単身で南タイに渡り、そこでムスリムのマレー人として暮らし始めた。一九五六年にサバ海岸を訪れ、インドネシア・ナシヨナリズムの理念が体现されている様子を目の当たりにして感激し、サバに残ることを決意した。K・バリについては K. Bai (2002)、山本(2006)を参照。

*17 ステファンのアナック・サバ概念は「サバで生まれ育ち、サバを祖国とみなすもの」であり、K・バリのパンサ・サバ

概念は「サバに住み、地元の（東洋）文化（たとえばマレー語）を身につけた人々」というもので、厳密に適用しようとすれば互いに相手を排除することになる。しかし、二人が密接に活動するなかで二つの概念がすり合わされ、互いを含む形で理解されていた。

*18 当時のブナパン・カダザン人指導者の中心人物の一人であるヘルマン・ルビンによる説明はLuping (1994)を参照。

*19 「原住民の日」は、もともとK・バリらが実施したマレー語文芸祭典を発展させて植民地政府がすべての原住民の祝日として認めたものだった。その実施当日である一九六〇年六月三〇日に各地のカダザン人協会が同時多発的にカダザン人の儀礼として収穫祭を行ったため、あたかもカダザン人の収穫祭のための祝日であるかのように理解され、現在にいたっている。収穫祭の成立については山本 (2002)を参照。

*20 サバのラジオ放送については研究がほとんどないが、一九五〇年代のラジオ放送に関する資料としては、サバ・ラジオ局が毎月発行していた番組表『Radio Sabah Calling』がある。

*21 後に独立後の総選挙でステファン率いる政党が第一党になれずに下野すると、それまでカダザン人を名乗っていた人々がドゥスン人であると名乗る事態が生じた。なお、「カダザン人かドゥスン人か」はその後もサバでしばしば議論され、一九八九年には両者の折衷案として「カダザンドゥスン人」という名称が提案され、政府機関やマスメディアで使われるようになった。これに対し、ムルト人がカダザンドゥスン人に含まれるかどうかも議論となり、現在では学術研究などで

は「カダザンドゥスン・ムルト人」とすることも少なくない。ただし一般の人々は、日常的にカダザン人やドゥスン人、あるいはさらにそれより小さな範囲を指す集合アイデンティティを文脈に応じて使い分けて暮らしている。

●参考文献

山本博之 (1996) 「二〇項目」と連邦・州関係——一九五〇年代カダザン民族主義の復活とその限界」原不二夫他編『国民開発政策 (NDP) 下のマレーシア』アジア経済研究所、一三一—一四九頁。

—— (1999) 「マレーシア・サバ州の州首相輪番制の導入で問われるもの」『アジアワールド・トレンド』四二号、八二—八八頁。

—— (2002) 「カダザン人のナシヨナリティとエスニシティ——英領北ボルネオ (サバ) における収穫祭の成立」『ODYSEUS』(東京大学大学院総合文化研究科) 六号、四一—六〇頁。

—— (2003) 「東南アジアにおけるムスリム同胞団の成立とその初期の活動について」『ODYSEUS』(東京大学大学院総合文化研究科) 七号、五九—七三頁。

—— (2006) 「脱植民地化とナシヨナリズム——英領北ボルネオにおける民族形成」東京大学出版会。

—— (2008) 「壁としてのジャウイ、橋としてのジャウイ——東南アジア・ムスリムの社会と言語」佐藤次高・岡田恵美子編著『イスラーム世界のことばと文化』成文堂、二〇—二二〇頁。

Arifin Omar (1993) *Bangsa Melayu: Malay Concepts of Democracy and Community, 1945-1950*. Kuala Lumpur: Oxford

- University Press.
- Glyn-Jones, Monica (1953) *The Dusun of the Penampang Plains in North Borneo*. Report to the Colonial Government, North Borneo, London.
- Granville-Edge, P.J. (1999) *The Sabahan: The Life and Death of Tun Fuad Stephens*. Selangor: The Writers' Publishing House.
- K. Bait (2002) *Memoir Karyawan Tamu DBP Cawangan Sabah: Dari Tendong ke Borneo*. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.
- Luping, Herman James (1994) *Sabah's Dilemma: The Political History of Sabah (1960-1994)*. Kuala Lumpur: Magnus Books.
- Nagata, Judith (1979) *Malaysian Mosaic: Perceptions from a Poly-Ethnic Society*. Vancouver: University of British Columbia Press.
- Roff, William R. (1967/1994). *The Origins of Malay Nationalism*. (2nd ed) Kuala Lumpur: Oxford University Press.

(やまもと) ひろゆき／京都大学地域研究統合情報センター)